

## 多元的一性を支える知の枠組みとは何か

田村高幸 (Takayuki TAMURA)  
千葉大学大学院社会科学研究院

「多元的一性を支える知の枠組み」について、教育学、社会学／人類学、哲学の観点から次のような提題を行ってもらい、それらの提題に基づき、「多元的一性を支える知の枠組みとは何か」という多元的一性を支える知およびそれらを与える枠組みの本質にかかわることについての多角的な総合討論を行う。

槇野沙央理 「何が Solipsismus とみなされてきたか」

概要：『論理哲学論考』（以下『論考』）を私たち自身の思索を自由な方向へ導くための場として活用できそうであるとの観点から『論考』を十全に取り扱うために、『論考』での「独我論」の取り扱いに着目した。まず、「独我論」関連言説の私たちの思索への寄与までも考察の対象とできる「独我論」関連のテキストを取り扱う方法を組み立てる。そして、それらを用いて『論考』の「独我論」ということをめぐりどのようなことが考えられてきたか、及び考察の成果のもたらすものについて論じる。

目時 修 「ウェルビーイングの視点から学習の過程を探索する」

概要：深い理解を促す学習活動を規定する要因について、学習の過程に焦点を当てて、ウェルビーイングの視点から探索する。特に、社会文化的な視点から実行機能（自己を認識する能力・人間関係を作る能力など）の発達についてウェルビーイングを高めることで学習にレリバンズ（関連性・意義）を感じられる知（活用できる知識）の獲得を可能にする学習の過程について考えていく。

山田瑞紀 「当事者性を表出するとは・Autoethnography の観点から」

概要：当事者性を表出することとはいかなることであり、当事者性の表出をすることの意義及び多元的一性との関連性について、自己リアリティ（いわば自己の担っている文化）の表出である自己エスノグラフィーの観点から論じる。

入江俊夫 「言語の使用を「記述する」とは何をすることなのか？」

概要：言語使用を「記述する」とは何をすることであるのか、という問題を扱う。その際に、ウィトゲンシュタインの遺稿全集出版（2000年に完了）以降、最良の遺稿研究の一つといえる、O. Kuusela の *The Struggle against Dogmatism: Wittgenstein and the Concept of Philosophy* (Harvard University Press, 2008) を参照しつつ考察を進める。まず、言語使用を「記述する」ことは、日常的な記述とは異なり、文法的規則を「提示する」ことであるとし、この文法的規則を「現実の言語使用を統制する規則」とする Hacker の論述に対する批判としての「我々の語の使用を見渡せるようにする記述の方法」とする Kuusela の論述を Hacker の論述に対する批判も含めて取り扱う。さらに、Kuusela の論じている、記述の正しさをどう考えるか、という点について考察するとともに、「意味の使用説」のような解明的言説は、通常の意味で正しさが問題となるテーゼではないものの、我々に積極的な示唆を与える、ある意味で

はそれまではなかった新しいものであることを論じる。

総合討論 司会 田村高幸 「多元的一性を支える知の枠組みとは何か」

概要 各提題者から各提題内容が「多元的一性を支える知の枠組みとは何か」という問いにいかなる点を答えているかを述べてもらい、そのうえで、この4人の提題を意義付ける知の枠組みについて討論することにより、「多元的一性を支える知の枠組み」とは何かを実践的に答えたい。